

過去という壁を越えた村上春樹の小説の主人公

ユルコヴィッチ・トマーシュ*

今年のコンソーシアムのテーマは『壁を越える』であるが、村上春樹の『ダンス、ダンス、ダンス』という長編小説（1988年出版）の終盤に、主人公が実際に壁を越える重要な場面が入っている。それには、小説の語り手である主人公が、夢の中の謎めいた部屋の壁の中へ消えていくガールフレンドを救うために、自分もその壁の中に入り、壁の向こう側まで通り抜けるという場面である。その小説を読んだ人なら皆わかるに違いないが、とても感動的で、意義深い場面である。本稿では、その場面が『ダンス、ダンス、ダンス』においてだけでなく、村上春樹の他の長編小説の文脈において意味することについても考察しよう。先ず、その場面を少し引用してみよう：

「ユミヨシさんは消えてしまったのだ。どこまで手をのばしても、彼女には届かないのだ。僕と彼女のあいだには、あの壁がたちはだかっているのだ。ひどすぎる、と僕は思った。無力感。ひどすぎる。僕とユミヨシさんはこちら側にいなくちゃならないんだ。僕はそのためこれまで努力してきたのだ。僕はそのため複雑なステップを踏みながらここまでやってきたのだ。

でも考えている余裕がなかった。ぐずぐずしている暇がないのだ。僕はユミヨシさんを追って壁にむかって足を踏み出した。そうする以外に方法はなかった。だって僕はユミヨシさんを愛していたのだ。」

（『ダンス・ダンス・ダンス』、下巻、360ページ）
この感動的な場面の、小説のストーリー展開における役割は、どのようなものであろうか？

私は、村上春樹の小説のストーリーを解釈する際、しばしばアメリカの文学理論家セームア・チャットマンらがまとめたナラトロジー理論を使ってきた。チャットマンのナラトロジーに対しての態度は、典型的な構造主義の態度と言えるでしょう。チャットマンによれば、小説にはそれぞれ、話筋（Story）、すなわち「出来事の連鎖」とは別に、そのストーリー、すなわち連鎖された出来事を様々な方法で並び替えたり、強調したりする「固有の語り方」（Discourse）があることに決まっている。

さて、村上春樹の主人公が『ダンス、ダンス、ダンス』の中で壁を越える場面は、「出来事の連鎖」、すなわちストーリーを形成する上で、どのように位置付けられるであろうか。それは「愛することが不可能になった」という主人公にとって、人生で一番大きな問題の解決に成功したのだと初めて分かる場面として位置付けることができると考える。小説の冒頭で、主人公は、誰も愛することができず、誰にも愛されていないことを理解していた。たとえガールフレンドがいても、長続きする関係にはなっていない。いつもすぐに別れてしまう。ガールフレンド達にとっても、他の友達にとっても、主人公は人間的に少し冷たい印象を与えている。

このように、『ダンス、ダンス、ダンス』のストーリーでは、主人公が「愛することが出来る」

*カレル大学大学院院生

主人公になるまでの旅が語られる。この意味での主人公の旅の姿を、今少し説明しよう。

主人公の旅のストーリーは、探偵小説の形で語られている。舞台は、バブル経済の前、1978-1983年の日本である。このストーリーを語るため、村上はマジック・リアリズムの手段として様々な比喩を使っており、ストーリーを把握するには、もちろんそれを徹底的に解釈する必要がある。それだけではなく、ストーリーそのものにアレゴリーとして解釈できる箇所が数多くあることを、作品を読み解く上でよく認識する必要もある。紙幅の都合でそのすべてのアレゴリーや比喩を細かく説明するのは不可能であるため、要点のみを説明してみよう。

主人公の抱えている、「愛の不可能」という問題をめぐる旅の始まりには、次のような出来事の連鎖がある。

- 1) 主人公の学校時代の知り合いに、五反田という俳優がいる。彼は金のために自分の才能を売ったりする、操り人形のような存在で、そのフラストレーションを解消することができず、「キキ」という、主人公の知り合いである売春婦を殺害する。
- 2) 愛することが出来なくなった主人公は、自分を呼ぶキキの夢を見る。キキは、彼に助けを求め、
- 3) そのとき、主人公はキキが殺害されたことをまだ知らない。主人公は夢の中のキキの願いに従って、二人が知っている、北海道にある「イルカホテル」に行く。そこに現れた「羊男」というアレゴリー的な人物に彼は忠告を受ける。問題を解決するため、「ダンスする」ことを勧められたのである。「ダンス」とは、ずっと同じ場所に留まるのではなく、より積極的に、正しい方法で生きることのアレゴリーである。
- 4) うまくダンスすることが出来れば、代わりに羊男が主人公の為に、まるで電話交換器みたい

に、「ただしい繋がり」を与えてくれると教えてくれる。「正しいつながり」とは、自分の抱えている問題の解決に役立ちそうな人物との出会いを意味している。

主人公が羊男に会う「イルカホテル」もまた、アレゴリー的な場所と言える。それを描写することで、村上は実際に、日本の近現代史にたいして自身の意見を述べているからである。久し振りにそのホテルに来て、主人公は大きなショックを受ける。初めて訪れた時は(『羊をめぐる冒険』という、別の長編小説のストーリーの中で)小さくて、汚い安ホテルであった。その建物には、以前の日本の植民地支配に関連する小さな役所があり、まだ全部の資料が揃えられて保管されている。二度目に来て見ると、もう以前の小さなホテルではなく、その代わりに立派でモダンかつ高級なホテルとなっている。

主人公は、ホテルのスタッフに、以前のホテルの成り行きについて質問してみるが、返事の代わりに、みんな沈黙するだけである。全員が何か心当たりがあることは明らかであるが、それを口にすることはない。しかし主人公がユミヨシさんという受付の女の子と知り合うと、彼女に、ホテルの中に、真っ黒な秘密の廊下のようなところが隠れていると告げられる。時々、そこにスタッフの誰かが偶然に入ってしまうこともあるが、ホテルの客の前でそれをオープンに言うのは、禁止されている。

主人公は、暗い植民地の時代を象徴するその廊下を見つけ、入る。その廊下は凍り付くほど寒く、途中で、急に右へ曲がる場所がある。その向こう側に、ロウソクの明かりが見えてくる。そこには植民地時代に関係がある資料が保管されてある部屋がある。そこで主人公は羊男に出会い、ダンスするように忠告されている。主人公はその忠告に従うが、すると、彼の「ダンス」のおかげで、反省していない植民地時代の日本の行為を象徴する「黒い廊下」に、少しずつ明かりが入り込み、

主人公は夢の中でその黒い廊下から壁を通り抜けて、自由になることが可能になる。

主人公の「ダンス」は具体的にどういう形をとるかということ、様々な人々に会ったり、おとぎ話の主人公と同じく、彼らを助けたり、手伝ったりしている。その代わりに、彼らはキキの殺害に関連した情報を与えてくれる。「愛することが出来ない」という自身の問題を解決するために、主人公はキキという売春婦の殺害の犯人を見つけなければならない。

こうして、自分の抱えた問題を解決するには、主人公が自分の周りの社会の問題を解決しなければならないようになっていく。

結局主人公は犯人を見つけることに成功する。上に述べているように、犯人はフラストレーションのいっぱいたまっている俳優の五反田である。

しかし、「俳優による売春婦の殺害」という事件と、主人公が明かりを入れることのできた「過去という黒い廊下」とは、どのような関係にあるのであろうか？思うに、それも、村上春樹が巧妙に使っているアレゴリーの一つである。

「売春婦が、フラストレーションのたまった、自由ではない俳優によって殺害される」という出来ごとは、『ダンス、ダンス、ダンス』のストーリーにおいて中心的な意味を持つ。ではどうやって犯人は被害者に会えたのか？それは偶然の産物ではなかったのだ。五反田が働いている会社そのものが、売春婦を商売の道具としている。特別な秘密のクラブがあり、政治の世界にも通じていて、政治家たちに守られながら、クライアントに売春婦を供給しているのだ。日本の女性だけでなく、ベトナム、フィリピンなど他の東南アジアの女性も働いていて、「全世界で利用できる」システムになっている。小説の中で明言はされていないが、やはりそのシステムは、第二次世界大戦の時にあった、いわゆる Comfort Women（従軍慰安婦）に関係があるに違いないと考えられる。

そう言う意味で、最悪の犯人は、自由な人では

ない五反田くんではなく、彼の住んでいる社会的なシステムである。そのシステムは、村上春樹が全ての自分の長編小説の中で描写する、1969年の全共闘という学生運動が失敗したあとの急激な経済成長時代の日本社会のシステムである。村上春樹はそのシステムを、第二次世界大戦とそれ以前の時代にルーツがある制度として描写している。お金さえあれば手に入らないものがない制度として。倫理に明らかに反しているものごとを含めてというわけである。

その逆に、『ダンス、ダンス、ダンス』の主人公が小説の中で、「ダンス」する場面では、いつも、どんなことをするときも、「お金のためではなく、倫理的に正しいからこそする」という態度をこまめにまもっている。それは、売春婦たちと五反田くんのような俳優たちとはまったく異なる態度である。だからこそ、自分のまことのこころを守り、周りの人びとを助けることができる。このように、イルカホテルの暗い廊下に関係する、殺害されたキキのことも、羊男のことも、主人公の良心の声を象徴するものとして解釈できる。

その良心の声に呼ばれて、主人公は結局、一番難しい役目を担うことになる。その苦役には、べつのアレゴリー的なジレンマが隠れている。キキの殺害の犯人が親友の五反田であることが分かったら、それに対して何も言わなくてもいいのかというジレンマである。

長い間迷った末、主人公は結局五反田くんにオープンに質問することが出来る。殺人という行為を見て見ぬふりをするのは、正しい「ダンス」ではないだから。たとえ状況がつかなくなるにしても。おとぎ話の世界とはまったく違って、五反田くんは自分の行為を反省して、自殺してしまう。それでも、主人公が正しいことをしたのは、明らかである。主人公が次にキキの夢を見たときに、部屋から暗黒がなくなり、その代わりに気持ちのいい日光がさしこむ。それだけではなく、主人公は小説の終わりに、ユミヨシさんを真剣に愛する

ことが出来るようになり、自分が暗い部屋から壁を通り抜けて逃げる事ができたという夢もみる。彼は探偵として「殺害された売春婦の事件」を解決したことによって、同時に、自分の心にあった、冷たい壁に囲まれた暗い部屋から逃げることも成功した。

村上春樹の長編小説は、一つの文学的な「コーパス」として分析することが可能だと考えられる。『風の歌を聴け』、『1973年のピンボール』、『羊をめぐる冒険』と、本発表で述べる『ダンス、ダンス、ダンス』の四部作はもちろん、それ以外の長編小説も、処女作が出版された1979年から、現在の2017年までに、主人公の心理的な成長を描写する「教養小説」として解釈することができる。

また、そのような1979年から2017年までの主人公の成長は、いつも、日本の近現代史と強い関係がある。

小説一冊ずつの物語の筋になる出来事を時間的順序で並べ、事情を細かく分析してみると、村上春樹の小説の主人公が生きている世界は、たとえ1969年の全共闘運動の世界であっても、ほとんどの場合、第二次世界大戦の影響が及び続けている世界である。第二次世界対戦の出来事の名残りが、まるで幽霊のように過去から主人公の生きている世界に現れる。最初の小説では、主人公はそういった成り行きを把握するように努めているが、自分が於かれた状況を改善することはまだできず、あくまで周りの世界の犠牲者にとどまり、幸せな人とは言えないだろう。その意味で、『ダンス、ダンス、ダンス』の主人公は、村上春樹の長編小説において、初めて積極的に自分が置かれている状況を改善することの出来た、非常に重要な主人公である。

参考文献：

- 村上春樹『風の歌を聴け』講談社、1997
- 村上春樹『1973年のピンボール』講談社、1983
- 村上春樹『羊をめぐる冒険』講談社、1998

村上春樹『世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド』、新潮社、2006

村上春樹『ノルウェイの森』、講談社、1991

村上春樹『ダンス、ダンス、ダンス』、講談社、2004

https://en.wikipedia.org/wiki/Comfort_women

[20.3.2017]

Chatman, Seymour. *Průběh a diskurs*, Brno: Host, 2008